科目ナンバリング	U-LAS04 20020 LJ46						
授業科目名<英訳>	グループ・ダイナミックス Group Dynamics			担当者所属職名・氏名	非常勤講師 大門　大朗		
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	教育・心理・社会(各論)	使用言語	日本語		
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義（対面授業科目）
開講年度・開講期	2026・後期	曜時限	月5	配当学年	全回生	対象学生	全学向

（総合人間学部の学生は，全学共通科目として履修登録できません。所属部局で履修登録してください。）

[授業の概要・目的]

本講義は、グループ・ダイナミックスの基礎的な概念、姿勢、理論を学習し、研究者らが積極的に現場に介入し現場の当事者とともに社会のベターメントを目指して実践すること－協同的実践－の意義について理解することを目的とする。グループ・ダイナミックスは、自然科学のように研究者らがその調査対象者（協力者）と一線を引き、現場を観察対象とみなすのではなく、研究者らによる影響を反省的・積極的に引き受け、現場の当事者らとともに現場の変化を促すアクション・リサーチを伴う研究分野である。その特徴は、人々のみならず制度、環境を含む集合体（グループ）と、それらの変化を捉える動力学（ダイナミックス）にある。自らが外部者としてなんらかの現場（研究フィールド、職場、組織等）に関わる際に、どのようなスタンスでそのグループに身を置き、何を目指すべきなのだろうか。この講義では、グループ・ダイナミックスの理論と実践について「かや」の比喩を通して、外部者と当事者がともに現場を変革する研究姿勢としての協同的実践、それらを支える基礎理論である活動理論、四肢構造論、規範理論を学習する。さらに、社会構成主義の観点から、言説空間を豊かにするグループ・ダイナミックスの実践について、自然災害やパンデミックなどの事例を通して、職場における問題（キャリア形成を含む）や組織における人の行動について具体的に理解を深める。

[到達目標]

グループ・ダイナミックスの基礎的な概念や理論について説明できるようになる。また、一般的な自然科学との対比から、グループ・ダイナミックスにおける協同的実践の意義について具体的な事例を通して理解できるようになる。

[授業計画と内容]

第1回オリエンテーション：講義の概要、グループ・ダイナミックスの特徴
第2回自然科学とグループ・ダイナミックス：「調査される迷惑」と研究倫理
第3回グループ・ダイナミックスとは：当事者と研究者による協同的実践
第4回基本的な考え方：集合性と人々を包む「かや」
第5回研究方法：研究者の位置づけと協同的実践
第6回活動の「かや」：活動理論による現場の変革
第7回講義前半のまとめ：活動理論を用いて自身の現場を変革しよう
第8回言語の「かや」：四肢構造論による言語と意味
第9回規範の「かや」：規範理論による「かや」の生成と変化
第10回群衆の「かや」：物理的集合性とシミュレーション
第11回二つのメタ理論：自然科学と人間科学
第12回人間科学の方法：「データ」とはなにか
第13回集合性から集合流へ：創発性、記憶、知識
第14回現場を変革する：被災地における協同的実践
第15回フィードバック

グループ・ダイナミックス(2)へ続く↓↓↓

グループ・ダイナミックス(2)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

学期末試験によって評価する（100%）。

[教科書]

杉万俊夫『グループ・ダイナミックス入門：組織と地域を変える実践学』（世界思想社、2013年）
（本書は絶版となっているが、集団力学研究所のウェブサイト（https://www.group-dynamics.org/）から無料でダウンロードできるため、電子版を使用する。）

[参考書等]

（参考書）
エンゲストローム『拡張による学習 完訳増補版：発達研究への活動理論からのアプローチ』（新曜社、2020年）
廣松渉『存在と意味 事的世界観の定礎（第1巻）』（岩波書店、1982年）
大澤真幸『身体の比較社会学Ⅰ』（勁草書房、1990年）
ガーゲン, K.J.『関係からはじまる―社会構成主義がひらく人間観』（ナカニシヤ出版、2020年）

[授業外学修（予習・復習）等]

講義前にテキストの該当章を読んでくること。講義後には、演習課題や参考文献を示すので、各自で理解を深められるようにする。

[その他（オフィスアワー等）]

[主要授業科目（学部・学科名）]